

学校図書館活性化プロジェクト報告会記録

東京学芸大学学校図書館運営専門委員会
記録 附属高等学校 高崎 朋彦

日時：2010年3月10日（水） 16:30～18:30

場所：東京学芸大学 講義棟S棟 105教室

1. 挨拶（東京学芸大学 副学長 長谷川 正）

平成22年度から数学、理科の新指導要領を選考実施。教育関連の記事が多い中、総理の誤読、改善を図る（はかる）を「ずる」と読む小学生。漢字を読めない小学生の増加。化学の授業でも漢字が読めなければ事故の元。PISAによる読解力の低下もゆとり教育の見直しの結果となった。学校図書館の活用。昔のような本の貸し借りだけでなく、教育センター、教育支援の機能を持たせたい。

2. 事業概要（東京学芸大学附属小金井小学校司書 中山美由紀）

データベースの構築は、附属学校の図書館の活性化を図るため、2年前より、各附属学校図書館、大学の附属学校運営部、大学図書館の3者で始められた。教育実習生、現職教員のための授業サポートのため、平成21年12月16日にデータベースを公開し、司書の入力によって現在30件前後のデータを追加しつつある。また、司書のいない特別支援学校のために、マルチメディアDAISYの研修会を実施した。現在は附属小金井小学校に保管してあるが、各学校の養護教諭、コーディネータを通じて普通学級への貸し出し、連携も計画している。

3. データベース概要（東京学芸大学附属世田谷中学校司書 村上恭子）

データベースの構築のみならず、その活用のため、インターネットを介したサイトの公開および各附属学校司書によるデータの入力を、風夢の橋本氏協力の下、実現させた。心がけたのは、検索しやすい画面の設計、教師との連絡に基づいた、資料提供に当たっての聞き取り事項、イメージしやすくするための表紙画像、ブックリストなどの項目であるが、ブックリストをエクセル形式にしたのは、閲覧者がデータを加工しやすくするためである。教師が作成した指導計画や指導案などはPDFで取り込めるようになっている。また、授業者のコメント、司書のコメントなども閲覧できるようになっている。また、授業時数の少ない科目ではデータベースになりにくいため、教師のインタビューを掲載している。データベースは、本を読むのが好きな児童・生徒のスキルを、教師が授業を通じて伸ばせるよう、開発されている。そこで、閲覧者に学校図書館のすべてを知ってもらえるよう、「学校図書館の日常」というページを設置している。「テーマ別ブックリスト」は、授業までいかないが、授業のヒントになるようなことをまとめている。現在はデータ数が少なく、活用事例の報告はないが、今後、データが蓄積されて

いけば、学生や教師へのヒントになると期待できる。また、複数キーワードに対応した検索機能など、実用面でのリクエストもあり、今後に期待したい。このデータベースは学芸大学の中のみでのものではなく、外部の関係機関との共同構築を目指したい。それには、協力相手の発掘と、データ精度の管理が今後の課題である。

4. データベース設計の経緯（合資会社風夢代表 橋本健志）

苦労した点は、Net Commons というオープンソースのシステムを利用しており、カスタマイズしやすいなど、よく出来ているが、ゼロからデータベースを作るより、既存のシステムの中に作るのは、元からあるシステムの制約に影響されるので苦労が多かった。たとえばトップページに検索画面を作れないなど、データベースで不可欠な検索機能をどのように閲覧者に伝えるか、などには実現に向けての要望も強く、技術側としては苦労が多かった。また、Net Commons 推奨のスペックと学芸大学のサーバーのスペックの違いのために、出来るはずのことが出来ないなどの苦労もあった。サイトのデザインも、様々な制約のもと、本学らしく、かつ使いやすいものを目指した結果、シンプルでメールやワープロ感覚で使える仕上がりになったと思う。卒業生として閲覧者の観点からサイトを客観視してみると、指導案などの現物の指導資料や、図書館機能の紹介があり、実習にいく前に見てみたかった。授業に使うには、または指導案の書き方は、といった使い方、司書にも実現可能な教員支援の具体例、各附属学校の教師の教材研究などがわかる。今後は広報活動、質の高い指導事例の取り込み、現場に出た卒業生の取り込みをすすめ、卒業生の支援的なメディアソースになれないかを考えていきたい。

5. 大泉小学校事例紹介（東京学芸大学附属大泉小学校司書 小野寺愛美）

昨年4月より新たに司書配属。事例の蓄積がないため、この1年は利用しやすい図書室を目指しリニューアル4月に提案をした後、部会、職員会議を経て、7月15日書架移動。7～8月に細部の改善を実施した。リニューアル前は、生徒の身長より高い本棚が配置され、利用頻度の高い図書が上の方に配架されるなど、使いにくい部分があったため、高い書架を2つに分解、物語に入り込めるような、やや囲まれた読み聞かせのスペースの確保、窓際の使用されていないスペースを絵本架にし、国際中等で利用しなくなった書架を譲り受けた。リニューアル直後、生徒の「図書館みたい」の感想に当惑したが、生徒の利用、教員からのレファレンス要請が増加した。教員との連携、共同作業場としての図書館の充実、さらなる利用の活性化、蔵書数の増加、全体的な質の改善、向上を今後の目標としたい。

6. 大泉小学校事例紹介（東京学芸大学附属大泉小学校教諭 上田真也）

創立70周年にして初めて図書館司書が配属されたので、児童がどのように受け止めているかをビデオで収録してみた。低学年では、配架場所が分かりやすくなった、見通しがよくなった、

読み聞かせのおかげで外国の本を知ることが出来たとの感想が得られた。高学年では、利用者数が増えた、配架場所の工夫で低学年、高学年とも書籍をとりやすくなった、雰囲気がよくなった、どこにあるか分からない本の場所も教えてもらえるようになった、それらすべてにより、利用者数が増えた、との感想が得られた。教員からは、調べ学習の資料準備や資料提供において迅速に対応してもらえた、とのコメントが得られた。こういったことが積み重ねられると、小学校教員の幅広い授業準備に大変役立つと信じている。

7. 総合メディアセンター紹介（東京学芸大学附属国際中等教育学校司書 渡辺有理子）

総合メディアセンターは、2009年夏オープンし、現在の蔵書数は約21,000冊（附属大泉中学校の11,000冊、附属高等学校大泉校舎の10,000冊の合計）である。閉校となった附属大泉中学校、あと2年で廃校となる附属高等学校大泉校舎の図書館を統合し、総合メディアセンターとした。統合前は午前と午後で中学校と高校を往復して兼務する時期があったが、現在はここで勤務する状態になっている。昨年から大泉小学校に司書が配属されただけでなく、大泉中学校に配属されたのも7年前で、他の附属と比べ、図書館司書と教員のつながりの歴史は浅い。今回の引っ越しに伴い、先生方の授業での利用頻度が一時的に低下した。しかし、新図書館（総合メディアセンター）センター棟1階で、図書の貸し借りだけではなく、多目的に使えるエリアを確保させてもらった。中央に書架などは置かず、机を撤去すると150人の椅子が並べられ、1学年単位での利用が可能に。正面白壁に投影も可能で、学年単位での利用、保護者会など、多目的利用が急増している。インターネットで3ヶ月先までの予約が可能。展示スペースとしての利用や、カルタ大会、各学年の授業での制作物、新入生歓迎用の作品などの掲示、展示場としても活用されている。伝統文化展示スペース。現在は多言語書架の整備、NIE実践指定校としての制作物の展示。先月からノートPC導入し、放課後に利用する中学生が増加している。今後の課題は資料の充実、メディアセンターとしての昨日の実装、教職員との連携の強化の3点である。開館後5ヶ月半で、国語や社会科が主だった授業での利用が、数学以外のすべての授業での利用実績があり、今後のいっそうの利用に向けて努力したい。

8. 総合メディアセンター紹介（世田谷小学校教諭 松本大介）

本を大切にしたい学級経営を心がけている。保護者による読み聞かせに触発され、自分でも調べ学習以外での図書館の活用に関心した。子供たちによる読み聞かせのきっかけ作りや、クラスに読んだ本の表紙の掲示するなど、周りにいつも本のある環境を作り出している。保護者からの読書をすれば文章力がつくか、などの質問もあるが、読書の効果がじわじわ現れるのはしばらく経ってから。生徒自身の反応を見ても、即効性は期待できない。エルマーの冒険をすごろくにするまでの司書との共同作業等を考えると、そこから課題、授業としての読み聞かせのあり方の再認識した。公共図書館の司書に聞いた場合と、学校図書館の司書に聞いた場合の違いとは、学校図書館の司書は、学校行事、カリキュラム、生徒情報を総合しての選書ができることである。司書には保護者会にも参加をして、保護者に発信をしてもらっている。教員が

話しても納得はしてもらえませんが、司書はある児童の6年間の図書の歩みを語れる、というのは公共図書館にはない強みである。今後も「共同」ではなく、司書と教諭の「協働」という姿を目指していきたい。

9. 感想・質疑応答

①（帝京大学講師 鎌田和宏）

学校図書館を利用した実践と、子供たちに学ぶ力をつけることは注目されているが、教員自身が、「学校図書館を利用した授業」を経験したことがあまりない。そこで、データベースは有用であるが、豊富なデータ量と、情報の鮮度が大切である。今後データを豊富にし、各附属学校の先生方の協力を得ながら、データベースを豊富にすることが欠かせない。また、データベースはきっかけにすぎず、司書が見れば、収録されている情報の意味が分かるだけで、それだけでは授業にどのように生かせるかのイメージはなかなかわからない。指導案と同じで、頭の中にイメージのない人が見てもわからない。今後も継続して、データをため、コーディネータを設置し、活用してほしい。

②（町田市立成瀬台中学校教諭 小寺美和）

今回のデータベース化のおかげで、授業の資料が見えるだけでなく、イメージがわきやすくなる。成瀬台中学校は文部科学省の経費で蔵書を増やせたが、重要なのは人であり、司書である。授業をする教員と司書の関係で授業のヒントがたくさん見つかる。ただ本があり、情報があるだけではだめで、どのように活用するかイメージしやすくすることが大切。

③（学校図書館図書を考える会 伊藤紀久子）

小学校の指導案などはたくさんあったが、中学校の指導案はなかなかみつからないため、このようなデータベースがあると有用である。自治体にこのようなデータベースの存在を伝えて活用の活性化を目指すことも積極的にやってほしいと思う。

④（東京学芸大学大学院2年 荻野聡）

創作の授業で詩の創作をした際、教室と図書室では児童の顔つきが全く違う。また、教員側も、本のことは司書に聞け、授業のことを自分がやればよいという安心感もある。今回のデータベースは様々な事例を紹介できるため、自分の授業に合わせたきっかけの発見に大変有効である。まだデータ数は少ないが、今後、収録数が増え、教員と図書館との連携がより密接になればよいと思う。

⑤（東京学芸大学教職大学院1年 掛川美穂）

データベースを見たが、音楽科の実践がまだあまり載っておらず、自分でも教員になってから実践を載せてみたいと思う。学校図書館のイメージが、本の保管場所でなく、情報センターや、本と人とをつなぐ場所としての新しい認識が変わった。データベースを元に先生方の持ち味を加え、目の前の子供たちを巻き込んだ授業をしてみたい。

⑥（狛江市立緑野小学校司書 松原礼子）

小学校 6 年の問題解決授業で、ツバルに関心を持った先生が授業を考える機会があったが、ブックリストだけでなく、ユニセフのポスター（少年兵士の写真）など、教材として貴重なものもある。図書資料だけでなく、こういった資料も図書館に集約したい。視聴覚資料などは、図書室か、近くの教室にあれば、PC を利用して提供することも出来る。検索エンジンで勝手に調べさせるのではなく、先生方が選んだ視聴覚資料をじっくり調べさせるのも司書と教員が作り上げる授業としては面白いと思う。図書資料に限らず、教材センターとしてのデータベースになるとさらに活用の幅が広がると思う。

⑦（全国学校図書館協議会 シタラ？）

昨年 11 月の横浜市の学校図書館セミナー以来、量も質も充実している。この勢いで来年、再来年度、口コミでこのサイトの有用性が広がっていくのではないかと思う。Twitter など、最先端のツールも活用しており、今後に期待したい。

⑧（文化女子中学校・高校司書 田怜紗）

学校図書館の日常の過去記事がストックされずに消えてしまうのはもったいない。一般の先生方は学校図書館の日常は全く知らないで、このようなサイトからでも知ってもらえると良い。

（東京学芸大学附属小金井小学校司書 中山美由紀）

この点は、附属世田谷中学校の村上司書と意見が合わなかったところなのだが、過去記事がストックされないと知れば読んでもらえるのでは、という見込みで保存しないできた。今後検討したい。

⑨（元早稲田大学非常勤講師、元都立高等学校司書教諭 大越朝子）

昭和 37 年当時と比べると画期的。当時は図書館で授業をやってくれそうな先生を捕まえてきて授業をやってもらい、少しずつデータを蓄積し、ある学校が充実し、転任先で活性化させてもらってすこしずつ広がった時代だったが、このような時代になり、いいものを構築しやすい世の中になったのではないか。

⑩（國學院大學司書課程 須永和之）

今回のデータベースは、学校司書の必要性がサブリミナル効果のような位置づけになると思うが、学校の先生のためではなく、学校の司書のためのデータベースにはならないのか。実際には、学校に司書がおらず、先生方が図書館を活用した授業している学校もたくさんある。学校司書がこれだけ支援しているということをアピールするだけでなく、学校司書がいなくてもこれだけの授業が出来る、というデータベースになると良いと思う。

（東京学芸大学附属小金井小学校司書 中山美由紀）

司書がないからこそデータベースの充実を、という意図もある。ブックリストや表紙イメージを載せたのはその目的もある。

⑪（東京学芸大学附属小金井小学校教諭 斉藤和貴）

実際に役に立って活用してもらい、教材研究に役立つと言うことが一番大切。司書がいることによって、図書館を活用することで授業が変わり、教師が変わり、児童が変わると言うことが大切である。児童は変わりやすいが、教師自身も変わり、自分が図書館にどのように入り込んでいくかが大切だと思う。

⑫（専修大学準教授 野口武悟）

学校図書館の取り組みであるにもかかわらず、過去の蓄積を消してしまうのはもったいない。データベースそのものの事例の充実を望みたい。特別支援学校での実践事例は全国的にほとんど共有されていないので、ぜひこれも充実させてほしい。

⑬（東京学芸大学教職大学院教授 成田喜一郎）

日本教職大学院協会の図書館部門も発足し、こういったデータベースを全国に広めながら、東京学芸大学が、図書館活用と教育のトップを率いていってほしいと思う。

⑭（東京学芸大学附属学校運営部参事 五十嵐一郎）

今年4月からの取り組みを通じて、いろいろな方々にお世話になった。本学以外に15名もの方々にご協力をいただいた。茂木健一郎が著書の中で、本学附属高校を「知の牙城」と著している。私は中山司書と「みんなで使おう学校図書館」というキャッチフレーズを考えたが、今回のデータベースはまさに、全国学校図書館の知の牙城となるようにという気持ちを込めている。藤原正彦氏は『日本人の矜持』で、「日本人的な信条を養うには、読書文化の復活と活字文化の復活が必要」と述べている。それらの理想を実現すべく、今後も各附属学校、大学図書館を中心に、本事業を進めてほしい。

10. 閉会挨拶、アンケートのお願い （東京学芸大学附属小金井小学校司書 中山美由紀）